

補註

- (1) 今日になつて「あら野」(元禄三年頃刊)掲載の俳句。他人が咲かせた見事な菊を眼の前になると、今更ながらに菊をつくろうと後悔させられる、の意。作者二水の事跡は未詳。
- (2) 慈童 菊慈童。周の穆王(註26)の待童。王の枕を跨いだ罪により、南陽郡酈県(現河南省・湖北省)に流されたが、その地で法華經の妙文が記された菊の葉の露を飲んで、不老不死となったという。
- (3) 淵明 陶淵明(三六五〜四二七)東晋の詩人。淵明は字、もしくは名とされる。下級貴族の家に生まれ、不遇な官途に見切りをつけ、彭沢(現江西省 県令を辞任、「帰去来辞」を賦し、故郷の田園にて隠棲生活を過ごした。「飲酒」では菊を手折る様子を詠んでいる。(註47)
- (4) 一筆菴主人 溪斎英泉の戯作者名。
- (5) 花鏡 陳扶揺『秘伝花鏡』一六八八年刊。
- (6) 種樹書 唐の郭蒙^{かくたか}駝^だ著 種樹に巧みであったことから、後に植木師や庭師のことを蒙駝師とも称した。
- (7) 菊譜 劉蒙『菊譜』(一一〇四)、史正志『菊譜』(一一七五)、范正大『菊譜』(二一八六)、周履靖『菊譜』(二五九八)か。
- (8) 菊經 松平頼寛著、宝暦五年(一七五五)刊。守山藩主松平頼寛が、自らの菊の栽培経験に基づき、栽培方法や害虫の駆除、道具など、三五の項目により著した栽培書。漢文であることから、家臣の白土盛隆が『菊経国字略解』として国字による解説を著している。
- (9) 花壇綱目 水野元勝著 寛文四年(一六六四)著、延宝九年

(一六八一)刊。植物を春夏秋冬と雑の部に分類し、一部は栽培方法を記す。菊は秋草の類とされ、「●花白赤薄色浅黄朽葉かば飛入咲分其外品々色くあり咲此まえへに同 ●養土は真土赤土肥土すな少ませ合用宜し ●肥は色くあり馬糞干粉にして根廻へちらすへし又雨のまへ小便根廻へかけてよし或は魚あらいしる用て宜し少はあぶらからす田作などもよろしきなり朝夕さいく手入して時々は水をかけてよし ●分植は二月の末より三月中旬の比まで」とある。また、「菊珍花異名の事」として七九の菊の名が、色と大きさと共に記載されている。

(10) 地錦抄 『花壇地錦抄』伊藤伊兵衛三之丞著、元禄八年(一六九五)刊。六卷五冊。伊藤伊兵衛三之丞は、江戸染井(現豊島区駒込)の植木屋であり、植物の栽培や商売を行う立場から、多くの植物について、名や特徴、栽培条件を詳細に記している。菊は「菊のるい」として一三五の名前を挙げている。「草木植作様伊呂波分」には栽培方法について、以下の通りに詳説する。「四五月迄は植えてよし。大形四月末に植えたるよし。植様は何時にても土の深さ五六寸ほどに溝をほりて合肥を入れて野土をませたるもよし。さて菊の苗をわけ壺本ずつ植えるなり。六月土用入る前後の日にくたしごえを菊の根より四五寸脇にかけてよし。その後の肥不用たるべし。多く肥を用いれば菊の葉かれてのぼる物なし。尤も竹を壺本ずつ立ててまがきをすべし。葉の間より枝出るをかき捨てたるよし。つぼみ少し見えたる時計のさきにて取りすて二三りんずつつけたるよし。玉ぼたんは六月土用過ぎ迄は何方にも肥やす事悪し候。土用過ぎていかにもうすくこやしを四寸ほど脇にすべし。もし土地よくて花だちふとく、葉も大きくなりて七月節に入りて後又一ぺん肥をかけたるもよし。肥すぎては菊ほずみ花

ひらかぬ物なり。輪のつく時分は八月節の前十日、節後十日、前後二十日の内に花の見ゆる様に作るべし。花見えて四十日をへて大形花ひらく物なり。花少しひらく時に菊の根の土をふみて地をかたくしてよし。一度にふみてはいたむ。さいさいふみ、水も節々りんよりかけたるよし。」

(11) **錦葉集** 『草木錦葉集』水野忠暁著 文政一二年(一八二九)刊。葉替わりや斑入りの植物の図と解説を収録、その数は約一千種にものぼる。内、キク科は十種。また、鉢植えの取り扱いや、土や肥料の種類、接木挿し木、害虫駆除の方法などを詳説する。

(12) **花壇養菊集** 志水閑事著 正徳五年(一七一四)刊。京都円山における菊会の図をはじめ、害虫や四八種の花形図、栽培の方法を記している。

(13) **草花絵前集** 伊藤伊兵衛政武者、元禄一二年(一六九九)刊。序文には、父(伊藤伊兵衛三之丞)が描く草花の絵に、花期や色彩を追記したとある。菊は「秋菊るひ」として四種類が掲載されている。

(14) **草木育種** 岩崎灌園著 文化一五年(一八一八)刊。二卷二冊。植物を栽培するに必要な日照・土壌などの環境、肥料や接ぎ木といった技術、冬越しの方法などを図入りで解説し、江戸時代における園芸書の到達点とされる。なお、鑑賞用だけでなく、稲など食用の植物も多数含まれている。

(15) **称徳** 第四八代天皇。聖武天皇の第一皇女。はじめ天平勝宝元年(七四九)即位して第四六代孝謙天皇となり、在位一〇年でのち淳仁天皇に譲位したが、天平宝字八年(七六四)重祚して称徳天皇となる。在位七年(七一八〜七七〇)

(16) **光仁** 第四九代天皇。在位一二年(七七〇〜七八一)。

(17) **百済国** 朝鮮古代の国名(四世紀前半〜六六〇年)。

(18) **類聚国史** 菅原道真編による勅撰の史書。寛平四年(八九二)成立。巻第七五歳時部六、延暦一六年(七九七)に行われた曲水の宴の項に、「十六年十月癸亥。曲宴。酒酣皇帝歌曰、己乃己呂乃。志具礼乃阿米爾。菊之波奈。知利曾之奴倍岐。阿多羅蘇乃香乎。」(このごろのしぐれのあめに きくのはな ちりそしぬべき あたらそのかお)という、桓武天皇による菊の歌が記録されている(斎藤正二「キクの文化史概説」社団法人全日本菊花連盟編『菊花譜―園芸文化の伝統とその歩み―』主婦の友社、一九八一年)。

(19) **公事根源** 「公事根源」一条兼良著。応永三〇年頃(一四二三頃)の成立。年中の宮中の公事や儀式の根源、沿革を記録する。

(20) **説文** 「説文解字」後漢の許慎(三〇?〜一二四?)著。一〇〇年頃の成立。九三三三字(及び異体字一三六三字)について五四〇の部首に分類し、漢字の形・音・義を説明した中国最古の字書。

(21) **爾雅** 春秋時代の字書。撰者は不明。漢字を意味により一九部門に分け、類義語や訓詁を集めたもの。

(22) **郭** 郭璞(二七六〜三三四)晋代の学者、詩人。博學で詩文に優れ、卜筮に詳しかった。「爾雅」(註21)の注釈を「爾雅注」に著した。

(23) **集句** 中国の字書「集韻」のこと。「広韻」に丁度・司馬光らが手を加え、治平三年(一〇六六)に完成させた。字数五万三五千二五字、全一〇巻。

(24) **和名抄** 「倭名類聚抄」の略称。日本最初の分類体の漢和辞書。源順著。承平年間(九三二〜九三八)に成立。語を天地・人倫

以下の部・門に分類し、音や意義を寛文で記し、和訓を万葉仮名で示している。

- (25) **月令** 「札記」全四九編のなかの一編。月ごとの風物・祭祀を規定した中国最古の歳時記のひとつ。季節を詩文に描きこむ際に意識されることが多かった。

- (26) **周の穆王、靈鷲山に** 周朝の五代目の王。中国全土を穆王八駿という名馬で駆つたとされる。天竺に至った際に、靈鷲山で法華経を説法中の釈尊に会い、国を統治するための教えを請う。その時に授けられた妙文は、後に慈童（註2）が菊の葉に書き写してその露を口にしたところ、不老不死を得ることになった。

- (27) **魏の文帝** 曹丕（一八七〜二二六）曹操の長男。父の跡を継いで魏の王となり、後漢の献帝に迫って帝位を譲り受け、自ら皇帝となって洛陽に都を移し、国号を魏と改めた。文学を好み、文学批評の先駆ともいえる「典論」を著した。

- (28) **彭祖** 菊慈童（註2）の改名。菊による不老不死の仙術を魏の文帝に授け、文帝が菊花の盃を伝えたのが、重陽の宴の始まりといわれる。

- (29) **西京雜記** 晋代の葛洪（かこう）の著として伝えられる。内容は、前漢の天子・后妃、及び有名人の逸話、宮廷の制度、風習や苑池、秘宝などを記録したもの。偽作ともされるが、後世では漢代の記録として利用された。

- (30) **続齊諧記** 中国六朝時代の小説集。宋の東陽無疑の著。もと七巻あったが散逸して、いまでは魯迅の『古小説鈎沈』に一六条が現存するのみ。のち梁の呉均によって『続齊諧記』が書かれた。

- (31) **汝南の桓景** 後漢の時代に汝南（現河南省東南部）に住む桓景という若者が、費長房という仙人の教えに従い、伝染病をもたらす疫病

神から、九月九日に、菊花酒と茱萸の葉と剣の力で、高台に避難した人々を守る逸話がある。

- (32) **月令広義** 明代の官吏官僚憑応京が万暦年間に著した著作で、中国の伝統的な年中行事・儀式・しきたりなどを解説したもの。

- (33) **御湯殿の記** 「御湯殿上日記」御湯殿（天皇の湯殿）において、天皇の側近に仕えた禁中の女官の日記。平仮名で記され、平安時代半ばより江戸時代末期までの内容が現存する。日記には天皇の日常の動静をはじめ、宮中の儀式、年中行事、皇室の経済、文学・歌舞などの宮廷の有様が記録されており、宮中における日常生活の模様を伺い知ることが出来る。

- (34) **世諺問答** 一条兼義良著・一条兼冬補。年中行事の由来根源について、各行事ごとに問答形式で解説を施したもの。

- (35) **巢鴨・染井の辺は菊を造るに** この地には特に植木屋が集中し、敷地の立地は、水はけの良さを好む菊の栽培に適していたのだろう。文化文政期には、植木屋ごとに工夫をこらした菊の造り物が観られるようになった。

- (36) **頑癡にして琴柱に膠する** 琴柱は和琴や箏の胴の上に立てて弦を支え、その位置を動かして音程を調節する部品。琴柱を膠で接着するとその調節が不可能となることから、物事にこだわって融通が利かないことの意となる。

- (37) **聖武帝** 第四五代天皇（七〇一〜七五六）。仏教への信心が篤く、全国に国分寺・国分尼寺、奈良に東大寺を建立し大仏を安置した。在位二五年（七二四〜七四九）。

(38) 続古今集 「続古今和歌集」文永二年（一二五六）成立。全二〇卷。聖武天皇の「百敷に：」は巻第二十賀部に収録されるが、後世の偽作であるとされる（齊藤正二「キクの文化史概説」社団法人全日本菊花連盟編『菊花譜―園芸文化の伝統とその歩み―』主婦の友社、一九八一年所収）。

(39) 菊合 菊の花を持ち寄り、その優劣を競う催事。新種や珍種は高値で取引されることもあった。江戸では隠居宅や寺院にて行われた。

(40) 練馬辺の土 岩崎灌園『草木育種』（註14）には「武蔵野の土」として、「巢鴨村辺より、板橋染井筋野土むさし野に似り。但し黒めなる土を上とす。」とある。この黒ボク土は火山灰から生成されており、江戸の周辺農村にも分布していた。

(41) 下田畑村あたりの白瓜 シロウリ（白瓜・越瓜）はマクワウリ（甜瓜）の変種で、香りや甘味は少ない。岩崎灌園著『武江産物志』文政七年（一八二四）には「越瓜 タバタ ハナマル」とあり、田端村（現北区田端・東田端・田端新町）で生産されていた。（野村圭祐『江戸の自然誌『武江産物志』を読む』どうぶつ社、二〇〇二年）

(42) 細根大根 ダイコンの一品種で、葉も小さく根も細い。江戸では河川に面した低地の村々で多く栽培された。

(43) 種床 種や苗を植え付ける場所。発芽や苗の成長を見て植替えを行う。菊のような小さな種の場合に有効な方法とされる。

(44) 近來は菊を以て種々の状ち物に造りて 本書が刊行された弘化三年（一八四八）前後は、巢鴨・染井において、大量の菊を使用して動物や富士山などを造作した見世物が盛んに行われた。

(45) 神農 古代中国における伝説上の皇帝。人々に農耕と医療を授けた

存在として、信仰の対象となっている。また、赤い鞭で諸草を打ち、その傷口を舐めて医薬を初めて作ったと伝えられ、医学・薬学の祖として崇敬された。

(46) 康風 小野蘭山「長物志」に「葛洪の『神仙伝』に「康風子は甘菊花、柏実散を服して仙を得」（『太平御覧』巻九九六）と見える」とある。

(47) 東籬に採ては真意を弁へ 陶淵明（註3）「飲酒」のうち、「采菊東籬下 悠然見南山 山氣日夕佳 飛鳥相与置 此中有真意」（菊の花を、家の東の籬の辺りに手折りつつ、ゆったりとくつろいだ気持ちで、南の山を眺める。山の竹まいは夕暮れに素晴らしく、飛ぶ鳥は、連れ立って帰っていく。この中にこそ、この世の真実がある。）の引用か。